

平成27年10月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町1-684 TEL0428-23-6859）

満月の夜に

今年（2015年）は、9月27日が中秋の名月。そして、翌9月28日が満月、しかも地球と月の距離が今年最短になり、いつもより明るく大きな月が見られるスーパームーンとして、新聞やテレビでも報道されました。さらに28日は、ヨーロッパ、アフリカ、北南米などで皆既月食の起こる日でしたが、日本からは見られないため、こちらはあまり注目されなかったようです。

27日、28日の両夜、私も自宅前で月を見上げました。薄い流れ雲を通しての月光でしたが、その光は明るく、近くの街灯の明かりにも負けず、地上に私の影をはっきりと落としていました。月の前を横切る雲の厚さの違いで、雲の輝きや地上の明るさが揺らぐように変わり、動きのある月夜でした。

星の明るさは、1等星、2等星などのように等級で表示します。太陽や月の明るさを等級に換算すると、太陽は約－（マイナス）26.7等星。月の場合、満月の平均的な明るさが約－12.7等星とされます。1等星より明るい星は0等星、さらに明るい星は－1、－2…というように、－（マイナス）符号の数字で表示します。そして、等級が1段違うと明るさは約2.5倍明るく（暗く）なるよう設定されています（1等星は2等星よりも2.5倍明るい）。太陽と満月では、明るさ（等級）の差は14等級になります。すると、太陽は満月よりも、2.5倍の14乗倍、約37万倍明るいということになります（ここまでの数値はあくまでも便宜的な概略値です）。

満月の明るさは、太陽の37万分の1。数値的にはかなり暗く感じます。しかし、感覚的にはどうでしょう。月の無い夜、人工的な明かりが届かない深い山の中では、自分の指先さえ見えないことがあります。しかし、満月の明かりがあると、新聞の文字も読めることがあります。冬の満月の夜、雪の積もった落葉樹林の中は、それこそ昼間のように明るく、ライトの明かりなしで歩くことができます。照明器具が少なかった時代、月明かりが人の

生活に大事であつたろうことが容易に想像できます。今、街中では夜も明るくなり、月明かりを頼りにする必要はほとんどないでしょう。漆黒の夜がないと、月明かりも際立ちません。しかし、満月の夜、部屋の灯りを消すと、窓から差し込む明るさがいつもより明るいことで、月明かりを感じるができます。

月は、アマチュア为天体観測の対象としても面白いテーマが探せます。また、夜の風景の要素としても楽しむことができます。富士山の山頂に太陽が沈むのは、ダイヤモンド富士として知られています。満月が富士山に沈むのは、パール富士と呼ばれ、ダイヤモンド富士よりも見るのが難しいものです。月が、明るい恒星や太陽を回る金星や木星と接近するのも面白い現象で、地上の風景と一緒に撮影すると、面白いご当地版「星景写真」になります。

(文責 櫻岡幸治)